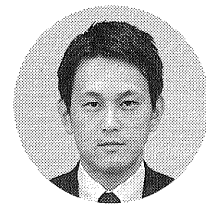


CO₂関係徐々に増進

HVAC展は省力化テーマに



原 正憲社長

「熱交換技術」を通じ、豊かな生活に貢献するを経営理念に置くユニットクーラー・熱交換器の専門メーカー、原製作所(社長＝原正憲氏、本社・茨城県稲敷市下根本7940-1)。

間もなく迎える2025年度決算(25年8月)の見通しは、ほぼ前期横這いでの着地とする。

同社においては近年、過去最高売上高を更新した2023年度までは、7年間にわたり更新を続け一定規模の母数を安定させるに至った。若手の減少とはなるものの、ほぼこの2年間は安全水域での着地となっている。

現状について原正憲社長は「今年は例年以上に4月、5月の需要が停滞したが大手冷凍機メーカーとの本格的な取引が開始されたことで今後は上向いていくことが予想される。需要推移においても来期及び再来年度に山場があるとの見方も強く

来期以降の需要の高まりに期待している」とした。一方で他社に先駆ける形で取組んできた自然冷媒系のCO₂ユニットクーラーの状況について直膨式は少ないものの、フライング系を含めると全体構成比の25%程度まで伸びている。今後も特殊案件を含めて一定量は見込めるものと踏む。

但し、同社の基本方針はユーザー層及び需要先の均衡を常に保ち、一社毎の販売比率を出来る限り平準化させ安定経営を目指すというもので、仮に需要の山があっても、それだけに捉われないうちの企業姿勢を貫いてきた。今後の需要の高まりが想定される大手とのコラボレーションなども同様の立ち位置を崩さない方針だ。

こうしたなか、来年度1月に東京ビッグサイトで開催されるHVAC&R Japan2024へは2012年の初出展から通算7回目の出展を決めた。前回2024年開催ではCO₂冷媒対応(直膨)の天吊型ユニットクーラー「HUC-56F1」ソックタクト対応型

ユニットクーラー「HUC-56F1」C5K1、HACCP対応の散水洗浄機能付きユニットクーラー「HUC-10HA1」の3機種を実機展示したほか、リクルート対策を目的に製作した企業プロモーション映像を放映した。過去6回の出展の中でもブリス来場者が600名を超えるという記録も更新している。

さて来年に控える同展



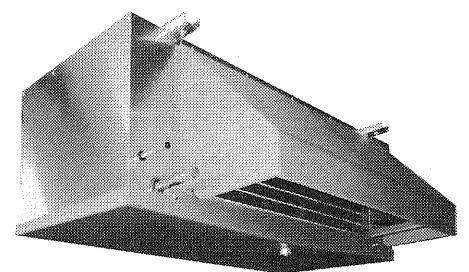
HVAC&R Japan2024の同社出展風景

たうえでの納品などで、現場における手間を和らげるようなものを検討している(原社長)という。

ビスに至る全ての段階で「品質の作り込み」を行う(4)顧客・社会の評価及び活動の成果を分析し、製品及び品質マネジメントシステムの有効性の継続的改善を推進するといふもの。

さて原製作所の製造する製品には次の4つの品質方針が掲げられている。(1)顧客が安心して使用できる製品を提供する(2)顧客の要求事項及び法的・規制要求事項を満たす製品を提供する(3)設計・開発から製造・アフターサー

こうした方針に則り生産される近年の代表例としてはCO₂関連では天吊型を中心に農業用、キノコ用、産業空調用、低温冷房用、氷温冷蔵用のTCタイプが下側吸込み両側横吹き出しで、逆向き(下向き)への変更が可能とする。また小型天



吊型で産業空調用、低温冷房用、冷蔵用のTNタイプは全機種に低騒音の送風機を採用。さらに中型・大型天吊型として冷蔵用のTFタイプは中型機種に低騒音の送風機を付など様々な要望に柔軟に対応している。

冷却器・熱交換

吊型で産業空調用、低温冷房用、冷蔵用のTNタイプは全機種に低騒音の送風機を採用。さらに中型・大型天吊型として冷蔵用のTFタイプは中型機種に低騒音の送風機を付など様々な要望に柔軟に対応している。

フード付きで冷蔵・冷凍用のTFタイプは全機種に吹出しダンプ及び吸込みフードを採用している。一方で特注対応となる特型製品はオールステンレスクーラー、銅管+アルミ(プレコート加工)フィン、コイル部へのカチオン電着塗装、送風機開閉式、ドレンパン開閉式などのほか、ドレンパン防熱、加熱ヒーター取付から弁類配管取付など様々な要望に柔軟に対応している。